AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2016.10) 平成27年度:22-26.

「赤ちゃんにやさしい病院」認定施設における高年初産婦の母乳育児に対する思い

富田 紗也子, 布宮 ゆり恵, 石田 真衣, 山川 桃

「赤ちゃんにやさしい病院」認定施設における高年初産婦の母乳育児に対する思い

旭川医科大学病院　周産母子センター
○富田紗也子、布宮ゆり恵、石田真衣、山川桃

キーワード：母乳育児、高年初産婦、BFH 認定施設

Ⅰ．はじめに

近年、35 歳以上の高齢出産の割合は増加しており、2011 年には第 1 子出産年齢が 30 歳を超えた。当院でも昨年の全分娩件数 339 件のうち 3 割が高齢出産であり、そのうち約 4 割は高年初産婦だった。出産年齢が高くなると母乳分泌が不足する要因が増え、先行研究でも母乳率が低くなることが明らかになっている。「赤ちゃんにやさしい病院(Baby Friendly Hospital:以下 BFH)」認定施設である当院の昨年の退院時完全母乳率は、20 代で 95.6%、30 代前半で 78.1%、35 歳以上で 52.6%と、高齢になるにつれて母乳率が低かった。母乳率に加え、私たちがこれまで関わった高年初産婦の中には母乳育児を希望していたが、母乳分泌不足から児の体重減少が続き混合栄養となり、母乳育児が順調にいかないケースもあった。そのため高年初産婦は妊娠期に思い描いた母乳育児が出来ず、負担やストレスなどマイナスな思いが多いのではないかと考えた。そこで、本研究では高年初産婦への母乳育児支援向上のため、高年初産婦がどのような気持ちで母乳育児を行っているかを明らかにした。

Ⅱ．目的

BFH の認定を受けている当院で出産した高年初産婦の母乳育児に対する思いを明らかにすること。

Ⅲ．用語の定義

1.高年初産婦：35 歳以上で初めて出産した人。
2.母乳育児：母乳のみを児に与えること。
3.混合栄養：母乳と人工乳を児に与えること。
4.BFH 認定施設：「母乳育児を成功させるための 10 ヵ条」(24 時間母子同室、医学的に必要のない限り母乳以外のものを与えない等)を長期に渡って遵守し、実践する産科施設。

Ⅳ．方法

1.研究デザイン

質的記述研究

2. 対象者

出産後に母子同室した、35 歳以上の初産婦

3. 調査期間

平成 26 年 8 月～10 月

4. データ収集・分析方法

基礎情報として診療記録から、年齢と授乳状況について情報を得た。事前に作成したインタビューガイドを使用し、研究協力の同意が得られた高年初産婦に、個別に半構造化面接を実施した。面接では母乳育児に対するイメージや今後の希望、母乳育児を体験しての思いを中心に質問した。面接は退院前日(産褥 4 日目)に、1 人 20 分間程度行った。面接内容は対象者の承諾を得た上で IC レコーダーに録音し、逐語録に起こした。対象者の母乳育児に対する思いが語られている内容や文脈に注目してコード化、カテゴリー化をした。

5. 倫理的配慮

研究対象者には、文書および口頭で研究の目的、方法について説明し同意を得た。研究参加は自由意思であり、不参加による不利益はないこと、途中辞退の権利を保障した。本研究は旭川医科大学倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号 14057）。

Ⅴ．結果

1. 研究協力者の背景

研究協力者は 35～46 歳の母親 4 名であり、4 名とも妊娠中より母乳育児を希望していた。退院前日の栄養法は完全母乳 3 名、混合栄養 1 名であった。

2. 高年初産婦の母乳育児に対する思い

母親の母乳育児に対する思いは、6 つのカテゴリーと 19 のサブカテゴリーが抽出された。【】はカテゴリー、《》はサブカテゴリーとし、以下に内容を示す。

【母乳育児に関する期待と不安】

母親は妊娠中から《母乳育児の利便性や経済性の期待》、《母乳育児が児に与える良い影響の期待》を抱いており、《母乳育児をしたいという意志》があった。一方で、インターネットや友人からの情報を得て、自分の母乳が出るか心配しており《母乳分泌に対する予期的不安》も同時に抱いていた。

【母乳育児をすることの困難感】

母親は実際に母乳育児を経験していく中で、《睡眠不足による辛さ》といった身体的疲労を感じていた。また、乳頭トラブルや児に有効な吸着をさせることの難しさを感じており、《乳頭トラブルによる苦痛や心配》、《吸着困難に対する困惑》といった授乳に対する困難感があった。

【自己効力感の高まり】

児の吸啜が上手になることや、母乳のみで体重増加がみられたことが、《母乳育児の成功体験による自信》となっていた。

【想像と実体験の乖離】

頻回授乳により十分な睡眠が得られず、《予想と異なる体力的な困難感》を感じていた。また、出産後すぐに母乳が出ると思っていた母親も多く、実際に母乳育児を通して《母乳分泌時期のイメージと実際のギャップに対する戸惑い》、《哺乳量や体重増加に対する心配》があった。

【母乳育児継続に関する葛藤】

全ての母親が《可能な限り母乳育児を続けたいという思い》を抱いていたが、《社会復帰を考慮した母乳育

児継続の迷い》、《年齢や家族計画を考慮した母乳育児継続の迷い》があった。また、夜間の授乳や頻回授乳から体力的負担を感じ、《自己の負担軽減のための混合栄養への揺らぎ》が生じていた。さらに、母乳のみで育てたいが、《児の体重減少による混合栄養の必要性の認識》をすることで混合栄養はやむを得ないと感じていた母親もいた。

【家族からの支援に対する思い】

実家が近く、《家族サポートの希求》がある母親がいた。その一方で、親が高齢であることや家族からの支援を要していないこと、夫の協力を得られることから《両親に頼らず自分達で育児していこうという意志》を持つ母親もいた。

Ⅵ. 考察

1. 高年初産婦の母乳育児に対する思い

母親は出産前から母乳育児に関する情報収集をしており、期待と母乳分泌に対する予期的不安を抱きながらも母乳で育てたいという意志を持っていた。しかし、母乳分泌や児の体重が順調に増加しないという体験から「意外と母乳が出るまで時間がかかって大変」と妊娠期の想像と実体験の乖離があった。さらに、実際に母乳育児を体験し、「眠れないのが辛い」といった睡眠不足感や「赤ちゃんが上手く吸えないからどうしていいかわからない」という授乳手技が上手くいかないなど母乳育児をすることの困難感を抱いていた。睡眠不足感に関しては、出産直後から母子同室し、授乳をはじめとした育児の習得や、育児のペースをつかむことから休息の時間を確保しにくいことが考えられる。森ら[1]は「夜間母子同室すると、夜間母子同室しない場合に比べて夜間の質のよい睡眠の確保がより困難となり、疲労が蓄積する傾向が示唆された」と述べている。そのような中で、「母乳で児の体重が増えたので今後も続けていきたい」というような成功体験による自信をつけていた。中沢ら[2]の報告でも、「授乳がうまくできるようになったり乳汁分泌量が増えてきたことが自信に繋がった」と述べており、授乳による困難感を抱きながらも、成功体験が母乳育児を可能な限り続けたいという思いに繋がっていた。さらに、高年初産婦は社会復帰や年齢、家族計画、自己の体力的負担から、母乳育児継続に関する葛藤を抱えていた。管理職に女性が占める割合は、年々高くなっている傾向にあり、年齢が高くなるにつれ社会的地位や役割があることから、産後の早期復職を考えることもある。また、次の妊娠までの時間的な余裕がなく、早期に次の妊娠に目を向けることがある。このような中で、仕事復帰までは可能な限り母乳育児を続ける、夫婦で協力した授乳方法の検討といった母親なりの方法を見つけ出そうとしていた。母乳育児継続に関する葛藤は、高年初産婦が仕事と子育ての両立に向けての準備や自己の年齢・体力を考慮できているからこそ生じ、高年初産婦特有の思いであると考える。

2. BFH 認定施設における高年初産婦の母乳育児支援

BFH 認定施設では母乳育児を成功させるための 10 カ条[3]に沿い、母乳育児を支援している。本研究で対象とした母親は、母乳育児のみで児の体重増加があったことが自信に繋がっていた。服部ら[4]は「頑張ったことが母乳育児の成功体験に結びつき、母親に自信が与えることとなれば、マイナスをプラスに転化できる」と述べており、母親が自分の成長を実感し、自己効力感を高められるような関わりが必要である。

また、母親は昼夜問わず授乳を行っていることで睡眠不足から体力的な困難感を感じていた。森ら[1]は「必ずしも産後入院中に終日母子同室を継続していなくても、退院後の自律授乳の継続、家族等のサポート、専門家のケアなどにより、完全母乳栄養となるという可能性がある」と述べている。医療者が休息確保のための一時的な児の預かりや、母親の話を聞き、気持ちに寄り添うことで一緒に解決策を考えていく支援が大切である。

高年初産婦は、母乳育児継続に関する葛藤がありながらも、母親なりのよりよい方法を見つけ出そうとする強みがある。高年初産婦特有の思いを理解し、支持しながら、母親の満足のいく方法で母乳育児を継続できるよう支援していくことが必要である。

Ⅶ.結論

1. 高年初産婦の母乳育児に対する思いとして、【母乳育児に関する期待と不安】、【母乳育児をすることの困難感】、【自己効力感の高まり】、【想像と実体験の乖離】、【母乳育児継続に関する葛藤】、【家族からの支援に対する思い】の 6 つのカテゴリーが抽出された。

2.高年初産婦は、体力的困難感や母乳育児継続に葛藤を感じながらも、母親なりの母乳育児を確立していこうとする特徴があった。

3.医療者は、高年初産婦の特徴や思いを踏まえ、母親の強みを活かした母乳育児を継続できるよう支援していく必要がある。

【引用文献】

1) 森恵美・土屋雅子：高年初産婦の産後入院中の睡眠期と覚醒期における身体活動量分析　夜間母子同室の有無による影響の検討，看護研究 Vol.47 No.2, pp.136－147，2014.

2)中沢恵美子・森恵美：35 歳以上で初めて出産した女性の産後入院中における母親としての経験，日本母性看護学会誌　Vol.13　No.1，pp.17-24，2013.

3)WHO：母乳育児成功のための 10 ヵ条のエビデンス，日本母乳の会，pp61-81，2006.

4)服部律子・布原佳奈：赤ちゃんにやさしい病院で母乳育児を体験した母親にとっての母乳育児の意味，岐阜県立看護大学紀要 Vol.9　No2, pp27-33, 2009.

「赤ちゃんにやさしい病院」認定施設における高年初産婦の母乳育児に対する思い

旭川医科大学病院　4階東ナースステーション
〇富田紗也子　石田真衣　布宮ゆり恵　山川桃

今回の研究の目的

35歳以上の高齢出産は増加傾向。当院の平成25年度の全分娩件数の3割は高齢出産であり、その中の4割は高年初産婦。出産年齢が高くなるにつれ母乳率が低くなる。(根津, 2007) 日々の褥婦との関わりの中で高年初産婦の中には母乳分泌不足などの理由から混合栄養になるケースが多いと感じた。

高年初産婦がどのような気持ちで母乳育児をしているのか？

本研究では、「赤ちゃんにやさしい病院」の認定を受けている当院で出産した高年初産婦の母乳育児に対する思いを明らかにすることを目的とする。

用語の定義

- 高年初産婦：35歳以上で初めて出産した人
- 母乳育児：母乳のみを児に与えること
- 混合栄養：母乳と人工乳を児に与えること

（1度でも人工乳を使用した場合は混合栄養とする）

- 赤ちゃんにやさしい病院認定施設

「母乳育児を成功させるための10カ条」（24時間母子同室、医学的に必要のない限り母乳以外のものを与えない等）を長期に渡って実践する産科施設のこと（以下、BFH認定施設とする）

研究方法

1. 研究デザイン：質的記述研究
2. 研究対象者：出産後に母子同室した高年初産婦
3. 調査期間：平成26年8月～10月
4. データ収集・分析方法

→半構成的面接を1人20分程度、退院前日に実施面接。内容はICレコーダーに録音し、逐語録を作成

5. 倫理的配慮

→研究参加は自由意思であり、不参加による不利益はないこと、途中辞退の権利を保障。

（旭川医科大学倫理委員会承認番号14057）

結　果　1. 研究参加者の背景

対象	年齢	退院前日の栄養法
A氏	30歳代後半	母乳栄養
B氏	40歳代前半	母乳分泌不足により混合栄養
C氏	40歳代後半	母乳栄養
D氏	30歳代後半	母乳栄養

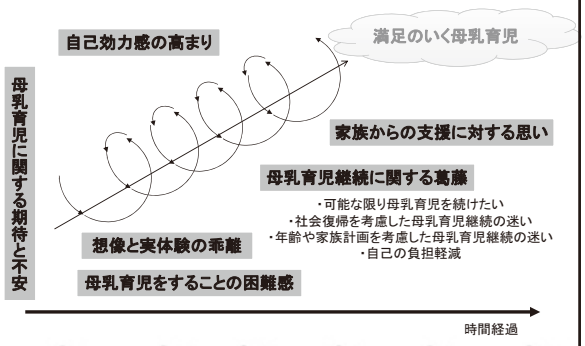
結　果　2. 高年初産婦の母乳育児に対する思い

カテゴリー	サブカテゴリー
母乳育児に関する期待と不安	母乳育児の利便性、経済性の期待 母乳育児が児に与える良い影響の期待 母乳分泌に対する予期的不安 母乳育児をしたいという意志
母乳育児をすることの困難感	睡眠不足による辛さ 乳頭トラブルによる苦痛や心配 吸着困難に対する困惑
自己効力感の高まり	母乳育児の成功体験による自信

結　果　2. 高年初産婦の母乳育児に対する思い

カテゴリー	サブカテゴリー
想像と実体験の乖離	予想と異なる体力的な困難感 母乳分泌時期のイメージと実際のギャップに対する戸惑い 哺乳量や体重増加に対する心配
母乳育児継続に関する葛藤	児の体重減少による混合栄養の必要性の認識 自己の負担軽減のための混合栄養への揺らぎ 家族の気遣いによる混合栄養への揺らぎ 社会復帰を考慮した母乳育児継続の迷い 可能な限り母乳育児を続けたいという思い 年齢や家族計画を考慮した母乳育児継続の迷い
家族からの支援に対する思い	家族サポートの希求 両親に頼らず自分達で育児していこうという意志

結　果　2. 高年初産婦の母乳育児に対する思い



考　察　1. 高年初産婦の母乳育児に対する思い

社会的地位や職場での役割から職場復帰を考える

年齢的なこともあり、次の家族計画について考えたい
体力的な面も考慮し、早いうちに次の妊娠を考えたい

⇩

母乳育児継続に関する葛藤

●母乳育児継続に関する葛藤を抱えながらも、今後の仕事や家族計画と現在行っている育児を両立できる方法を見つけることができる。

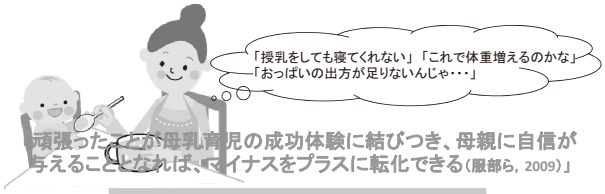
★夫婦間で授乳方法の検討
（高年初産婦の場合は祖父母にあたる家族の年齢も高く、サポートを得にくいこともある。そのため、夜間は夫が搾乳をボトル哺乳するなど）
★職場復帰までは母乳育児を頑張る
など。

高年初産婦の強み

考　察　2. BFH認定施設における高年初産婦の母乳育児支援

1.母親の自己効力感を高める関わり

母乳育児を成功させるための10か条
6.「医学的な必要がないのに母乳以外のもの、水分、糖水、人工乳を与えないこと」



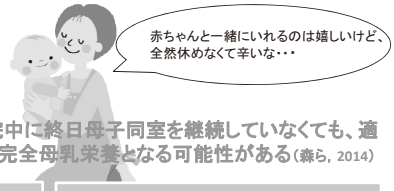
頑張ったことが母乳育児の成功体験に結びつき、母親に自信が与えることとなれば、マイナスをプラスに転化できる（服部ら，2009）」

成長を実感し、自己効力感を高める

考　察　2. BFH認定施設における高年初産婦の母乳育児支援

2.休息を確保しながら母乳育児ができる関わり

母乳育児成功のための10か条
⑦「母子同室にすること。赤ちゃんと母親が1日中24時間、一緒にいられるようにすること」



必ずしも産後入院中に終日母子同室を継続していなくても、適切な支援により、完全母乳栄養となる可能性がある（森ら，2014）

休息の確保　**気持ちに寄り添い、解決策への導き**

結論

●高年初産婦の母乳育児に対する思いは、体力的困難感や母乳育児継続に関する葛藤があった。

●高年初産婦は、自分なりに母乳育児を確立していこうとする強みがあった。

●医療者は、高年初産婦の抱く思いを理解し、母親の強みを活かして母親が満足のいく母乳育児が継続できるよう支援していく必要がある。

引用文献

1) 森恵美・土屋雅子：高年初産婦の産後入院中の睡眠期と覚醒期における身体活動量分析　夜間母子同室の有無による影響の検討，看護研究Vol.47 No.2，pp.136－147，2014.

2)中沢恵美子・森恵美：35歳以上で初めて出産した女性の産後入院中における母親としての経験，日本母性看護学会誌　Vol.13 No.1，pp.17-24，2013.

3)WHO：母乳育児成功のための10ヵ条のエビデンス，日本母乳の会，pp61-81，2006.

4)服部律子・布原佳奈：赤ちゃんにやさしい病院で母乳育児を体験した母親にとっての母乳育児の意味，岐阜県立看護大学紀要 Vol.9 No2，pp27-33，2009.

ご清聴、ありがとうございました！！